

新版

しんぱん

指導要文集

しどうようもんしゅう

第一章

だいいっしょう

信心の基本

しんじん

きほん

使命

しめい

予、よ
少量しょうりょうたりといえども、
忝かたじけなくも大乘だいじょうを学がくす。

002
立正安国論りっしょうあんこくろん

使命しめい 36 ページ 9 行

この理^りをし^知らず見^みずして名聞^{みょうもん}・狐疑^{こぎ}・偏執^{へんしゅう}を致^{いた}せるは、
墮^だ獄^{ごく}の基^{もと}なり。ただ願^ねわくは、
経^{きょう}を持^{たも}ち、名^なを十^{じっ}方^{ぽう}の
仏^ぶ陀^たの願^{がん}海^{かい}に流^{なが}し、
誉^ほれを三^{さん}世^ぜの菩^ぼ薩^{さつ}の慈^じ天^{てん}に施^ほすべ
し。

（030 持妙法華問答抄^{じみょうほつけもんどうしょう}）

使命^{しめい}
514 ページ 13 行

にちれんとう たぐ
日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、過去かこの
いん
因にもとづきたり。

（095 おんぎくでん
御義口伝

使命しめい
1021 ページー2行

ししく ほとけ せつ せつぽう ほつけ べつ
「師子吼」とは、仏の説なり。説法とは法華、別しては

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経なり。

し ししようさず

みようほう

し

でし

「師」とは師匠授くところの妙法、「子」とは弟子

う

みようほう

く

していとも

とな

受くるところの妙法、「吼」とは師弟共に唱うところの

おんじよう

さ

よ

まつぽう

音声なり。「作」とは、「おこす」と読むなり。末法にし

なんみようほうれんげきよう おこ

て南無妙法蓮華経を作すなり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

しめい

使命 1043
―ジ―2 行)

ししく

ほとけ

せつぽう

せつぽう

ほけきよう

べつ

師子吼とは仏の説法のことです。説法とは法華経、別して

なんみようほうれんげきよう と

ししく し

ほとけ

南無妙法蓮華經を説くことです。師子吼の「師」とは、師である仏

さず みようほう

し

でし う

みようほう

が授ける妙法であり、「子」とは、弟子が受ける妙法であり、

く ししよう でし

とな

おんじよう

さ

「吼」とは、師匠と弟子と、ともに唱える音声をいいます。作と

よ

ししく おこ

まっほう

はおこすと読みます。「師子吼を作す」とは、末法において

なんみようほうれんげきよう おこ

南無妙法蓮華經を作すことをいいます。

いま にちれんとう たぐ
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、皆
じゆ るるい
地涌の流類なり。

（095 おんぎくでん
御義口伝

しめい
使命 1064 ページ 15 行

にちれん もんか なんみようほうれんげきよう とな もの
いま日蓮とその門下で、南無妙法蓮華經と唱える者は、すべて
じゆ ぼさつ けんぞく
地涌の菩薩の眷属なのです。

おうばいとうり こ とうたい あらた む さ さんじん かいけん

桜梅桃李の己々の当体を改めずして無作の三身と開見す

すなわ りよう ぎ

れば、これ即ち「量」の義なり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

しめい
使命 1090 ページ 9 行)

さくら さくら うめ うめ もも もも すもも すもも

桜は桜、梅は梅、桃は桃、李は李と、おのおのの姿を改

む さ さん じん ほ と け ひ ら む り よ う ぎ

めずに、そのまま無作三身（仏）と開いていくことが無量義の

りよう い ぎ

「量」の意義なのです。

ほけきよう かんじん しよぶつ がんもく みようほうれんげきよう ごじ まっぼう

法華經の肝心、諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法

はじ いちえんぶだい 広 たも ずいそう にちれん

の始めに一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相に、日蓮

先 驅

さががけしたり。

和 党 にじんさんじん かしよう あなん すぐ

わとうども二陣三陣つづきて、迦葉・阿難にも勝れ、

てんだい でんぎよう 超

天台・伝教にもこえよかし。

しゅじゅおんふるまいごしよ

(107種々御振舞御書

しめい

使命 1227 ページ 11 行)

ほけきよう かんじん しよぶつ がんもく みようほうれんげきよう ごじ

法華經の肝心であり、諸仏の眼目である妙法蓮華經の五字

まっぼう はじ ぜんせかい ひろ ずいそう にちれん

が、末法の初めに全世界に広まっていくなすべき瑞相として、いま日蓮

せんく

いっとう

もの

にじんさんじん

つづ

がその先驅をきつたのです。わが一党の者たちよ、二陣三陣と続い

だいほう

ひろ

かしよう

あなん

すぐ

てんだいだいし

でんぎようだいし

てこの大法を弘めて、迦葉・阿難にも勝れ、天台大師、伝教大師

こ

にも超えていきなさい。

いのちかぎ

あ

命限り有り、

お

惜しむべからず。

ねが

ついに願うべきは仏国な

ぶつこく

り

121

富木入道殿御返事

(願望仏国の事)

ときにゆうどうどのごへんじ

がんぼうぶつこく

こと

使命

1283

ページー13行

しめい

いのち

かぎ

命は限りあるものです。

お

惜しんではなりません。ついに願うべき

ねが

ぶつこく

けんせつ

ものは仏国の建設なのです。

しょうがい もと おも き お いま ひるがえ

ただし、生涯、本より思い切り了わんぬ。今に翻反るこ

な うえ いこん な もろもろ あくにん ぜんちしき

と無く、その上また遺恨無し。諸の悪人はまた善知識な

しょうじゆ しやくぶく にぎ ぶつせつ よ しきよく

り。摂受・折伏の二義、仏説に任る。あえて私曲にあら

ばんじ りようぜんじようど ご

ず。万事、靈山浄土を期す。

ときどの ごへんじ しょうてんかご ゆえん こと

(123 富木殿御返事 (諸天加護なき所以の事)

しめい

使命 1292 ページ 14 行)

わたし しょうがい おも き

ただ私の生涯についてはもとより思い切っているところです。

なん ひるがえ うら く

どんな難にであつても 翻ることもなく、また恨みも悔いもありま

あくにん ぜんちしき とき おう しょうじゆ

せん。もろもろの悪人も善知識なのです。時に応じた摂受、

しやくぶく

かた

きようもん

すこ

にちれん

しけん

折伏のあり方も経文によるのであつて、少しも日蓮の私見では

りようぜんじようど

あき

ありません。すべては霊山浄土で明らかになるでしよう。

いたずらに曠野にすてん身を、同じくは一乗法華のかた
投こうや 捨 み おな いちじようほつけ 方
になげて、雪山童子・薬王菩薩の跡をおい、仙予・有徳の
なこうだい とど ほつけ ねはんぎよう と い
名を後代に留めて、法華・涅槃経に説き入れられまいらせ
ねが
んと願うところなり。

（149 金吾殿御返事 きんごどのごへんじ）

使命 しめい
1355 ページ 4 行

よ
予この記きの文もんを拝見はいけんして、両眼りょうがん滝たきのごとく、一身いっしんあまね
よろこ
く悦えべり。

（
162 曾谷入道そやにゅうどう許御書もとごしよ）

使命しめい
1407 ページ 13 行

もし、しよこの書を見聞してけんもん宿習有らば、しゆくじゆうあその心こころを発得すほつとくべし。

162 そやにゆうどうどのもとこしよ
曾谷入道許御書

しめい使命
1410
ページー10行

いっしょう

夢

うえ

あす

期

こつじき

一生はゆめの上、明日をごせず。いかなる乞食にはなる

ほけきよう

瑕

たも

とも、法華經にきずをつけ給うべからず。

しじょうきんごどのごへんじ

ふかしやくしよりよう

こと

(208 四条金吾殿御返事 (不可惜所領の事))

しめい

使命 1583 ページ 10 行

にんげん

いっしょう

ゆめ

できごと

あす

いのち

人間の一生は夢のなかの出来事のようなもので、明日の命もわ

こじき

ほけきよう

かりません。どのような乞食になろうとも、法華經にきずをつけては

なりません。

ほけきよう

ほうもん

いちもんいつく

ひと

語

法華經の法門を一文一句なりとも人にかたらんは、過去の

しゆくえん

思

宿縁ふかしとおぼしめすべし。

しいじのしろうどのごしよ

(258 椎地四郎殿御書

使命

1720

ページー14行)

ほけきよう

ほうもん

いちもんいつく

ひと

と

かこ

法華經の法門を、一文一句であつても、人に説くことは、過去の

しゆくえん

ふか

宿縁が深いのだとこころえていくべきです。

きようもん いっさいきよう すぐ

この経文は一切経に勝れたり。

ちはし もの おう

地走る者の王たり、師子

おう

そらと もの おう

王のごとし。

空飛ぶ者の王たり、鷲のごとし。

わし

せんにちあまごぜんごへんじ しんじつほうおんぎよう こと

(265 千日尼御前御返事 (真実報恩経の事))

しめい

使命 1737 ページ 11 行

きようもん いっさいきよう すぐ

この経文は一切経に勝れています。

ち はし もの おう ししおう

地を走る者の王・師子王

そらと もの おう わし

のようなものです。空飛ぶ者の王・鷲のようなものです。

かこ ほけきよう けちえんごうじよう ゆえ げんざい きよう じゆじ
過去に法華經の結縁強盛なる故に、現在にこの經を受持
す。

(276 生死一大事血脈抄

しょうじいちだいじけつみやくしょう

しめい 使命 1775 ページ 10 行

かこ しゆくえん お きた こんどにちれん でし な たも
過去の宿縁追いかって、今度日蓮が弟子と成り給うか。

しゃか たほう ごぞんちそうろう
釈迦・多宝こそ御存知候らめ。

（276 生死一大事血脈抄

しめい
使命 1776 ページ 8 行

かこ しゆくえん
（あなたは）過去の宿縁によつて、このたび日蓮（大聖人）の

でし しゃか たほう にぶつ
弟子となられたのでしようか。そのことは釈迦・多宝の二仏こそがご

ぞん
存じでありましょう。

じゆ ぼさつ 先 駆 にちれんいちにん じゆ ぼさつ かず

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり。地涌の菩薩の数にも

い にちれん じゆ ぼさつ かず

や入りなまし。もし日蓮、地涌の菩薩の数に入らば、あ

にちれん でしだんな じゆ るるい

に、日蓮が弟子檀那、地涌の流類にあらずや。

しよほうじつそうしよう

(280 諸法実相抄

しめい 使命 1790 ページ 10 行)

ほんげじゆ ぼさつ せんく き にちれん ひとり

本化地涌の菩薩の先駆を切ったのは日蓮ただ一人です。あるいは

じゆ ぼさつ はい にちれん じゆ

地涌の菩薩のなかに入っているのでしょうか。もしも日蓮が地涌の

ぼさつ いちいん おそ にちれん でし だんな じゆ ぼさつ

菩薩の一員であるならば、恐らく日蓮の弟子や檀那も地涌の菩薩の

けんぞく

眷属でないはありません。

きよう い よ ひとり

経に云わく「能くひそかに一人のためにも、法華経の

ほけきよう

ないしいつく と まさ し ひと すなわ によらい

乃至一句を説かば、当に知るべし、この人は則ち如来の

つか によらい つか によらい じ ぎよう

使いにして、如来に遣わされて、如来の事を行ず」。あに

べつじん と たも

別人のことを説き給うならんや。

あま ひと われ 褒 とき

されば、余りに人の我をほむる時は、いかようにもなり

こころ しゅつたい そうろう ことば

たき意の出来し候なり。これ、ほむるところの言よ

起 そうろう

りおこり候ぞかし。

しよほうじつそうしよう

(280) 諸法実相抄

こんど

しんじん

致

ほけきよう

ぎようじや

いかにも、今度、信心をいたして、法華經の行者にて

通

にちれん

いちもん

たも

とお、日蓮が一門となりとおし給うべし。

しよほうじつそうしやう

(280 諸法実相抄

しめい

使命

1791

ページー6行)

こんど

しんじん

ふる

お

ほけきよう

ぎようじや

どうしても今度は信心を奮い起こして法華經の行者として、

にちれん

いちもん

しやうがい

つらぬ

とお

日蓮の一門としての生涯を貫き通していきなさい。

ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給うべし。
ほけきよう な 立 み 任 たも

280 諸法実相抄
しよほうじつそうしやう

使命 しめい
1791 ページ 13 行

とにもかくにも、法華經の行者として名を立て、法華經に身を任
ほけきよう ぎやうじや な た ほけきよう み まか

せていきなさい。

しかれば、
たてまつ奉れば、
たも給うべし。

こんど今度、ほけきよう法華經のため^みに身^すを捨て^{いのち}命をも^{うば}奪われ
むりようむすうこう無量無数劫の間^{あいだ}の思^{おも}い出^でなるべし^{おも}と思^きい切^きり

(295 大井莊司入道御書

おおいのしょうじにゆうどうへいしよ

しめい使命
1823
ページー2行

いまだこうせん広宣ふ流布せざる間あいだは、身命しんみようを捨すてて随力ずいりきぐつう弘通いたを致すべきこと。

（
456 につこうゆいかいおきぶみ日興遺誠置文

使命しめい
2196 ページ 9 行